

## 時の付加詞節における「時制調和」現象の「事象時調和」現象としての再定義

著者	金子 義明
雑誌名	文化
巻	84
号	3,4
ページ	1-12
発行年	2021-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00131303">http://hdl.handle.net/10097/00131303</a>

文化 第84巻 第3・4号 一秋・冬一 別刷  
令和3年3月31日発行

# 時の付加詞節における「時制調和」現象の 「事象時調和」現象としての再定義\*

金 子 義 明

# 時の付加詞節における「時制調和」現象の 「事象時調和」現象としての再定義\*

金子 義 明

## 1. はじめに

英語の時の付加詞節 (temporal adjunct clause) の時制とその付加詞節が生起する主節の時制との間には、Geis (1970) が時制調和 (tense harmony) と呼んだ制約現象が存在する。

- |   |                    |
|---|--------------------|
| (1) a. John left when Bill left.            | (Geis (1970: 83))  |
| b. John will leave when Bill leaves.        | (ibid.)            |
| c. *John left when Bill leaves.             | (ibid.)            |
| d. *John will leave when Bill left.         | (ibid.)            |
| e. I left {after/before} Bill left.         | (Geis (1970: 132)) |
| f. I will leave {after/before} Bill leaves. | (ibid.)            |
| g. *I left {after/before} Bill leaves.      | (ibid.)            |
| h. *I will leave {after/before} Bill left.  | (ibid.)            |

文法的な (1a) と (1e) では、主節と付加詞節の時制が共に過去時制 (past tense) であり、一致している。非文法的な (1c) と (1g) では、主節が過去時制であり、付加詞節が現在時制 (present tense) であるので、一致していない。(1b) と (1f) では主節に will が生起しているが、will は未来時制 (future tense) ではなく未来予測 (future prediction) を表す法助動詞である (cf. Huddleston (1995)、Huddleston and Pullum (2002)、Enç (1996)、金子 (2008, 2009, 2018)) ので、will は「現在時制 + will」の具現形であり、したがって主節と付加詞節の時制はともに現在時制であり一致している。(1d) と (1h) では、主節の時制が現在時制で付加詞節の時制が過去時制であるので一致していない。<sup>1</sup> Geis (1970) はこのような時の付加詞節の時制と主節の時制の間に見

られる共起制限を時制調和と呼んだ。

本稿では、時制調和現象に対する金子（2019）の分析を吟味し、その問題点を指摘するとともに、より妥当な分析を提案する。

## 2. Kaneko (2019) の分析

前節で概観した時制調和現象は、従来は、主節の時制と時の付加詞節の時制が、[+Pres(ent)] あるいは [+Past] について同一の値をとることを要求する規則によって捉えられた (Geis (1970: 83)), 今井・中島 (1978: 408))。例えば、金子 (2013) では次のように定式化されている、

## (2) 時制調和の制約

時の付加詞を導く P の補部節の時制の値 ([+Pres] または [+Past]) は、その PP が付加される節の時制の値と一致しなければならない。  
(金子 (2013: 46))

しかし、(2)の制約に従わないにもかかわらず、文法的である事例が指摘されている。Declerck (1997)は、主節が現在完了形の場合、when 節に現在完了形が生起する場合と過去形が生起する場合があることを指摘している。

- (3) a. I have often helped him when he has been ill. (Declerck (1997: 152))  
 b. I have often helped him when he was ill. (ibid.)  
 (4) a. Have you ever helped him when he has been ill?  
 (Declerck (1997: 153))  
 b. Have you ever helped him when he was in trouble? (ibid.)

(3a) と (4a) では when 節に現在完了形が生起しているのに対して、(3b) と (4b) の when 節には過去形が生起している。Declerck は、(3a, b) は、それぞれ (5a, b) のパラフレーズが可能であり、また (4a, b) は、それぞれ (6a, b) のパラフレーズが可能であると述べている。

- (5) a. (On the occasions) when he has been ill, I have often helped him.  
(Declerck (1997: 152))

b. It has often happened that I helped him when he was ill. (ibid.)

(6) a. When he has been in trouble, have you ever helped him?

(Declerck (1997: 153))

b. Has it ever happened that you helped him when he was in trouble?

(ibid.)

(3a) と (4a) のように、when 節に現在完了形が生起する事例については、上記 (2) によって説明される。現在完了形は「現在時制 + 完了助動詞 have」であるので、主節と when 節の時制 T はともに素性 [+Pres] をもち、その点で時制が調和している。

(7) [<sub>TP</sub> I T-[+Pres] have often helped him [<sub>PP</sub> when [<sub>TP</sub> he T-[+Pres] have been ill]]]

しかし、(3b) と (4b) では when 節に過去形が生起しており、主節の時制 T が素性 [+Pres] をもつのに対して、when 節の時制 T は素性 [+Past] をもつので、両者の時制素性の値は一致していない。

(8) [<sub>TP</sub> I T-[+Pres] have often helped him [<sub>PP</sub> when [<sub>TP</sub> he T-[+Past] have been ill]]]

このような事例の存在を踏まえて、金子 (2019) は、時制素性の同一性に基づく制約 (2) に対する代替案として、時の付加詞節の現在時制の認可条件 (9) と過去時制の認可条件 (10) を提案している。

(9) 時の付加詞節の現在時制は、主節の参照時 RT が発話時 ST と同時である場合に認可される。 (金子 (2019: 7))

(10) 時の付加詞節の過去時制は、主節の事象時 ET が発話時 ST より以前、すなわち過去時を指す場合に認可される。 (金子 (2019: 8))

この提案は、Kaneko (2014, 2016)、および金子 (2016) の時制解釈システムに基づいている。その時制解釈システムでは、時制は、時制解釈の基点とな

る評価時 (evaluation time=EvT)、文の叙述の対象となる参照時 (reference time=RT)、事象の生起時を表す事象時 (event time=ET) の組み合わせによって表示される (cf. Reichenbach (1947))。主節の直示的 (deictic) 時制の場合、その評価時  $EvT_D$  は発話時 (speech time=ST) と同定される。例えば、下記 (11) には (12) の時制表示が与えられる。 (‘A, B’ は「A と B が同時」であることを表すものとする。)

(11) John is moving his arms as he is skating. (Hornstein (1990: 54))

(12)  $ST=EvT_D$ ,  $RT$ ,  $ET_{move}$

(12) の表示では、(11) の主節の参照時と事象時が発話時と同時であることが表示されている。(11) の付加詞節の時制は現在時制であり、主節の参照時  $RT$  が発話時  $ST$  と同時であるので条件 (9) により認可される。

次に付加詞節が過去時制である (13) の主節には (14) の時制表示が与えられる。(‘A\_\_B’ は「A が B より前」(または「B が A より後」) を表すものとする。)

(13) John left when Bill left.

(14)  $ET_{leave}$ ,  $RT$ \_\_\_\_ $ST=EvT_D$

(13) の付加詞節の時制は過去時制であり、主節の事象時  $ET_{leave}$  は発話時  $ST$  よりも以前であるので、条件 (10) に合致して認可される。

ここで上記の主節が現在完了形である (3a,b) に立ち戻る。それぞれ (15a, b) として再掲する。

(15) a. I have often helped him when he has been ill. (= (3a))

b. I have often helped him when he was ill. (= (3b))

完了助動詞 have は事象時  $RT$  が参照時  $RT$  よりも前 (‘ $ET$ \_\_\_\_ $RT$ ’) であることを指定するので、この 2 つの文の主節には同一の時制表示 (16) が与えられる。

(16)  $ET_{help}$ \_\_\_\_ $RT$ ,  $ST=EvT_D$

すなわち、(15a,b)の主節は現在完了形であり、参照時 RT は発話時 ST と同時であるのに対して、事象時  $ET_{help}$  は発話時 ST よりも以前である。(15a)の付加詞節の時制は現在時制であり、条件(9)に合致して認可される。(15b)の付加詞節の時制は過去時制であり、条件(10)に合致して認可される。このように、主節が現在完了形である場合、付加詞節の時制は現在時制でも過去時制でも認可される。

### 3. 事象時調和現象としての時制調和現象の再定義

本節では、2節で概観した金子(2019)の2つの認可条件の問題点を指摘し、その問題点を克服する代替案として、「事象時調和制約」を提案し、代替案によって時制調和制限が捉えていた事例のみならず、問題となった事例も適切に分析されることを示す。

#### 3.1 金子(2019)の問題点と代替案

前節では、時制調和現象に対して、従来の主節の時制の値に基づく定式化(2)((17)として再掲)に対する代替案として、金子(2019)は主節の参照時 RT の解釈に言及する現在時制の認可条件(9)((18)として再掲)と、主節の事象時 ET の解釈に言及する過去時制の認可条件(10)((19)として再掲)を提案しているを見た。

##### (17) 時制調和の制約

時の付加詞を導く P の補部節の時制の値([+Pres] または [+Past])は、その PP が付加される節の時制の値と一致しなければならない。

(18) 時の付加詞節の現在時制は、主節の参照時 RT が発話時 ST と同時である場合に認可される。

(19) 時の付加詞節の過去時制は、主節の事象時 ET が発話時 ST より以前、すなわち過去時を指す場合に認可される。

(18) および (19) に基づく分析は、時制調和現象に対して記述的には正しい結果を与えているが、以下の点で問題がある。

第一に簡潔性の問題がある。従来の時制調和の制約(17)は簡潔であり、経験的には2節で見たような問題点があるが、時制の調和現象に対する統一的な分析

を意図した定式化になっている。それに対して、代替案は、付加詞の時制が現在時制である場合と過去時制である場合に対して、それぞれ (18) および (19) の 2 つの認可条件を用いており、統一的分析を与えているとはいいがたい。

第二に、(18) と (19) の定式化には、内在的に統一化を困難にする要因が存在している。付加詞の時制が現在時制の場合には、主節の参照時 RT の解釈に言及しているのに対して、付加詞の時制が過去時制の場合には、主節の事象時 ET の解釈に言及している。この相違がなぜ存在するのかを説明する必要があるのと同時に、この相違が存在する限り 2 つの認可条件の統一化は困難である。

この点を踏まえて、(18) と (19) の認可条件に対する修正案として「事象時調和制約」を提案する。

#### (20) 事象時調和制約

時の付加詞節とそれが修飾する主節の事象時 ET は、その解釈が過去時／現在時／未来時のいずれであるかの点で一致していなければならない。

この制約は、付加詞節の時制が現在時制である場合と過去時制である場合について、統一的定式化がなされている。従来の時制調和制約 (17) との著しい相違点は、(20) の事象時調和制約では、時の付加詞節についても主節についても「時制」に対する言及がなく、事象時の解釈についての一致を要求している点である。すなわち、問題の調和現象は、時制調和現象ではなく事象時調和現象として捉えるべきであることを意味している。以下では、制約 (20) の妥当性を示すことによって、問題の調和現象を事象時調和現象と捉えることの妥当性を示す。

### 3.2 事象時調和制約による時制調和現象の分析

3.1 節で事象時調和制約 (20) ((21) として再掲) を提案した、

#### (21) 事象時調和制約

時の付加詞節とそれが修飾する主節の事象時 ET は、その解釈が過去時／現在時／未来時のいずれであるかの点で一致していなければならない。



以下では制約 (21) の経験的妥当性を示す。

まず中核的な事例を見よう。

(22) John is moving his arms as he is skating. (= (11))

(23) a. 主節 :  $ST=EvT_D, RT, ET_{move}$

b. 付加詞節 :  $ST=EvT_{(N)D}, RT, ET_{skate}$

ここでは、時の付加詞節の評価時  $EvT$  が直示的時制であるか非直示的時制 (non-deictic) であるかの問題には立ち入らず、 $EvT_{(N)D}$  と表記することにし、直示的時制と同様に発話時  $ST$  と同定されるものとする。(23a) の表示では、(22) の主節の事象時  $ET_{move}$  が発話時  $ST$  すなわち現在時と同時にであることが示されており、現在時と解釈される。(23b) の付加詞節の時制は現在時制であり、この場合もその事象時  $ET_{skate}$  は発話時  $ST$  と同時であり、現在時と解釈される。したがって、(22) の主節と付加詞節の事象時はともに現在時と解釈され、その点で調和している。

主節と付加詞節の時制がともに過去時制である (24) を見よう。

(24) John left when Bill left. (= (13))

(25) a. 主節 :  $ET_{leave}, RT\_ST=EvT_D$

b. 付加詞節 :  $ET_{leave}, RT\_ST=EvT_{(N)D}$

この例では、主節の事象時も付加詞節の事象時も発話時  $ST$  よりも前、すなわち過去時と解釈されるので調和している。

主節と付加詞節の時制が一致せず、時制調和違反とされた例を見よう。

(26) a. \* John left when Bill leaves. (= (1c))

b. \* I left {after/before} Bill leaves. (= (1g))

(27) a. 主節 :  $ET_{leave}, RT\_ST=EvT_D$

b. 付加詞節 :  $ST=EvT_{(N)D}, RT, ET_{leave}$

これらの例では、主節の事象時は発話時  $ST$  よりも前であり、過去時と解釈される。付加詞節の事象時は発話時  $ST$  と同時であり、現在時と解釈される。し

たがって、これらの例の主節の事象時と付加詞節の事象時の解釈は調和せず、制約 (21) に違反する。

次に、主節が現在完了形である事例を見よう。

(28) I have often helped him when he has been ill. (= (3a, 15a))

(29) a. 主節 :  $ET_{\text{help}} \text{ } \_\_\_\_\_\_ RT, ST = EvT_D$

b. 付加詞節 :  $ET_{\text{be}} \text{ } \_\_\_\_\_\_ RT, ST = EvT_{(N)D}$

この例は、従来の時制調和制約では、主節と付加詞節の時制がともに [+Pres] の値をもち、時制が調和するので適格であるとされた。事象時調和制約によれば、主節の事象時と付加詞節の事象時がともに発話時 ST よりも前、すなわち過去時と解釈されるので、事象時の解釈が調和しており適格であると分析される。

下記は従来の時制調和制約にとって問題となった例である。

(30) I have often helped him when he was ill. (= (3b, 15b))

(31) a. 主節 :  $ET_{\text{help}} \text{ } \_\_\_\_\_\_ RT, ST = EvT_D$

b. 付加詞節 :  $ET_{\text{be}}, RT \text{ } \_\_\_\_\_\_ ST = EvT_{(N)D}$

従来の時制調和分析によれば、(30) の主節の時制は [+Pres] をもち、付加詞節の時制は [+Past] をもつので、時制素性の値が一致しない。そのため誤って不適格とされる。これに対して、事象時調和制約によれば、主節の事象時と付加詞節の事象時がともに発話時 ST よりも前、すなわち過去時と解釈されるので、事象時の解釈が調和している。したがって、正しく適格な文として分析される。

(30) のように主節が現在完了形で、付加詞節が過去時制である事例は、付加詞節が since 節である場合には普通に見られる組み合わせである。

(32) a. She has lived in Berlin since she married.

(Huddleston and Pullum (2002: 141))

b. Jill has sold over 200 policies since she joined the company.

(Huddleston and Pullum (2002: 697))

(33) John has been living here since his father {died/\*dies}.

(今井・中島 (1978: 400))

今井・中島 (1978: 400)) は、時制調和の観点から (33) を例外として扱っている。しかし、事象時調和の観点から見ると、例外ではなく、主節と付加詞節の事象時の解釈がともに過去時であり、事象時調和を示す例として分析される。

最後に主節が未来予測の法助動詞 will を含む例を見よう。

(34) a. John will leave when Bill leaves. (= (1b))

b. I will leave {after/before} Bill leaves. (= (1f))

Kaneko (2014, 2016)、および金子 (2016) の時制解釈システムの提案に従い、未来予測のモダリティを表す法助動詞 will は、未来予測の起点となる参照時  $RT_{will}$  をもち、通例の参照時  $RT$  が  $RT_{will}$  よりも後である ( $'RT_{will} \text{---} RT'$ ) ことを指定するものとする。また、時の付加詞節の現在時制は、金子・遠藤 (2001: 62) の提案に従い、(i) 通例の現在時制のように参照時  $RT$  が評価時  $EvT$  と同時 ( $'EvT, RT'$ ) (すなわち同時性) を表すのに加えて、随意的に (ii) 参照時  $RT$  が評価時  $EvT$  よりも後 ( $'EvT \text{---} RT'$ ) (すなわち未来性) を表すものと考えよう。<sup>2</sup> すると、(34) の文には次の時制表示が与えられる。

(35) a. 主節 :  $ST = EvT_D, RT_{will} \text{---} RT, ET_{leave}$

b. 付加詞節 :  $ST = EvT_{(N)D} \text{---} RT, ET_{leave}$

これらの例では、主節の事象時も付加詞の事象時も発話時よりも後、すなわち未来時と解釈される。したがって、事象時の解釈は調和している。

下記の例では付加詞節の時制は過去時制である。

(36) a. \*John will leave when Bill left. (= (1d))

b. \*I will leave {after/before} Bill left. (= (1h))

(37) a. 主節 :  $ST = EvT_D, RT_{will} \text{---} RT, ET_{leave}$

b. 付加詞節 :  $ET_{leave}, RT \text{---} ST = EvT_{(N)D}$

これらの例では主節の事象時は未来時と解釈されるが、付加詞節の事象時は過去時と解釈されるので、事象時の解釈が調和せず不適格と分析される。

以上のように、事象時調和制約は、従来の時制に言及する時制調和制約の記述の問題点を回避するばかりでなく、金子（2019）の分析の経験的および概念的問題点も克服して、問題の調和現象に対する統一的分析を可能にしている。

#### 4. むすび

本稿では、英語の時制調和現象に対する金子（2019）の分析を批判的に検討し、その問題点を指摘した上で、代替案として、主節の時制にも付加詞節の時制にも言及せず、事象時が過去時・現在時・未来時のいずれであるのかに言及する事象時調和制約を提案し、その経験的および概念的妥当性を示した。本稿の分析が妥当であるならば、いわゆる時制調和現象は事象時調和現象として再定義すべきである。

\* 本稿の研究は、2018～2021年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）課題番号 18K00636「極小主義プログラムの新たな展開を踏まえた論理形式表示の研究」(研究代表者・金子義明)の援助を受けている。

#### 注

1. なお、時の付加詞節には未来予測の will が生起することができない。

- (i) \*We will begin dinner {when /before /after} my father will arrive.  
(荒木・小野・中野 (1977: 351))

しかし、時の付加詞節には、単純未来の will を含めた認識様態 (epistemic) の法助動詞も生起することができない。

- (ii) \*We will begin dinner when my father {may/must} arrive. (ibid.)

この制約の説明については今後の課題とする。

2. このような現在時制の振る舞いは条件の if 節にも見られる。

- (i) If you miss class tomorrow, you will not hear Professor Grant's elucidation of Hugo's metaphor. (Baker (1995: 553))

ただし、if 節の場合、未来予測（認識様態）の will が生起する場合がある。

- (ii) a. If it' ll be of any help, I' ll come along. (Palmer (1974: 148))  
 b. If the water will rise above this level, then we must warn everybody in the neighborhood. (Quirk et al. (1985: 1009))

上記の注 1 で述べたように、時の付加詞節では未来予測の will が生起しないので、will の生起・不生起に関与する時の付加詞節と if 節の特性の解明が今後の課題となる。なお、条件の if 節における will に関しては吉良（2016）が詳細に考察している。

### 参考文献

- 荒木一雄・小野経男・中野弘三（1977）『現代の英文法 9 助動詞』研究社。  
 Baker, Carl L. (1995) *English Syntax*, 2nd ed., MIT Press, Cambridge, Mass.  
 Enç, Mürvet (1996) "Tense and modality," *The Handbook of Contemporary Semantic Theory*, ed. by Shalom Lappin, 345-358. Blackwell, Oxford.  
 Geis, Michael (1970) *Adverbial Subordinate Clauses*, Doctoral dissertation, MIT.  
 Hornstein, Norbert (1990) *As Time Goes By: Tense and Universal Grammar*, MIT Press, Cambridge, Mass.  
 Huddleston, Rodney D. (1995) "The case against a future tense in English," *Studies in Language* 19, 399-446.  
 Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.  
 今井邦彦・中島平三（1978）『現代の英文法 6 文Ⅱ』研究社。  
 金子義明（2008）「英語法助動詞の時制解釈について」『東北大学文学研究科研究年報』第 58 号, 29-63.  
 金子義明（2009）『英語助動詞システムの諸相——統語論・意味論インターフェース研究』, 開拓社。  
 金子義明（2013）「英語における時制の内部素性とその分布特性について」『東北大学文学研究科研究年報』62 号, 29-60.  
 Kaneko, Yoshiaki (2014) "Remarks on Sequence of Tense in English," *Explorations in English Linguistics* 28, 27-55.  
 Kaneko, Yoshiaki (2016) "Remarks on Double Access Phenomena in English Finite

Complement Clauses,” *Explorations in English Linguistics* 30, 33-57.

金子義明 (2016) 「不定詞補部節の時制解釈におけるモダリティについて」『文化』第 79 巻第 3・4 号, 42-58.

金子義明 (2018) 「学習英文法と時制の概念をめぐって」『英語学を英語授業に活かす——市河賞の精神を受け継いで——』池内正幸・窪蘭晴夫・小菅和也 (編), 217-232, 開拓社, 東京.

金子義明 (2019) 「時の付加詞節における時制の調和現象と極小主義プログラムについて」『文化』第 82 巻第 3・4 号, 1-14.

金子義明・遠藤喜雄 (2001) 『機能範疇』研究社.

吉良文孝 (2018) 『ことばを彩る 1 テンス・アスペクト』研究社.

Palmer, F.R. (1974) *The English Verb*, Longman, London.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.

Reichenbach, Hans (1947) *Elements of Symbolic Logic*. Macmillan, New York. Reprinted by Dover Publications, New York, 1980.

## **Redefining the ‘Tense Harmony’ Phenomena in Temporal Adjunct Clauses as the ‘Event Time Harmony’ Phenomena**

**Yoshiaki KANEKO**

In this paper, I will examine the analysis of Kaneko (2019), in which the tense harmony phenomena (Geis (1970)) observed in temporal adjunct clauses are accounted for in terms of two interpretive licensing conditions for tenses of temporal adjunct clauses. I will point out conceptual and empirical problems with these conditions, and propose a unified single licensing condition which is formulated in terms of event time harmony between a temporal adjunct clause and its host matrix clause. In other words, the phenomena in question should be redefined as the event time harmony phenomena.